

## しゃっちょうは行く!

4

### Broaden your horizons ④ ~さあ、視野を広げて!~

こんにちは。メディセレのしゃっちょう、児島恵美子です。

さて、私は起業して間もない頃、アメリカを訪れる機会をいただきました。薬業界においてアメリカは、日本の15年先を行っていると言われております。したがって、アメリカの薬業界は、今後の日本の薬業界の発展を考える上で貴重なモデルとなります。アメリカ随一のドラッグストアであるウォルマートやライトアイド、先進的な医療を行う総合病院ワシントンメディカルセンターなどをこの目で実際に見てきました。特に、大手ドラッグストアは私にとって印象的で、広大な店舗に、レジ係が1人、売り場係が1人、棚は欠品だらけ……。日本では考えられないことです。監視カメラ設備だけは万全でしたが、合理化、機械化が進んでいて、人件費が大幅に削減されているようでした。利益を上げるためということからなのかもしれませんが、販売業、特に薬は「人から人へ」という温かさが必要ではないかと思いました。しかしながら、消費者には気付かない戦略（商品の配置や品揃え）があちらこちらにちりばめられており、かという私もその術中にはまりまして、予定外の買い物をしてしまう始末でした。



ドラッグストアの奥には調剤スペースがあり、日本では見られない、ボトル調剤、ペットの処方せん受付（飼い主は動物病院では薬をもらえません）も行っています。このようなこと

から、アメリカは医・薬の役割分担が日本より進んでいることがわかりました。また、アメリカには処方せん枚数による薬剤師の人数制限（日本では薬剤師1人あたり処方せん40枚）は存在しません。店舗によっては1人の薬剤師が150枚の処方せんを扱っています。これならば、薬剤師の能力に応じて年収が決定されます。ドライブスルー薬局もアメリカにはしっかり根付いていました。

1980年代から約20年間、アメリカにおいて薬剤師は信頼される職業No.1を誇っていました。9・11事件以降、消防士にその座を譲るまでは……。薬剤師への信頼の礎となっているのは、もちろんしっかりとした知識や技術の裏付けによるものですが、ドライなアメリカ社会の中でeasy access（気楽に話しかけられる）、free access（医学的な相談に対して金銭を要求されない）が可能な薬剤師という存在はとても貴重なものなのでしょう。日本の薬剤師も10年後にはアメリカのような高い社会的地位が確立されていることを願っています。

Medisere（メディセレ） 代表取締役社長 児島 恵美子